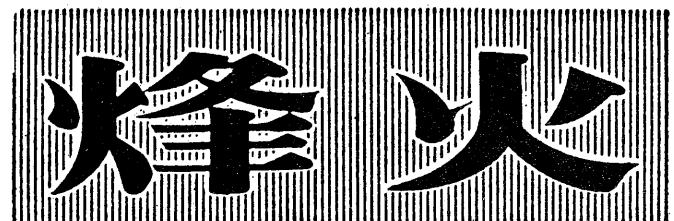


☆帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義の武装反革命を粉碎し、世界革命戦争—世界プロ独を組織する世界単一党を国際階級闘争の最前線に組織せよ！

1980年
3月20日
第329号
編集発行人 高木一夫
一部 200円



共産主義者同盟（全国委員会）

- 大阪戦旗社 大淀区本庄東2丁目2の31
とみやビル15号 Tel(06) 371-3706
- 郵便振替 大阪—6333 高木一夫
- 銀行口座 第一勧銀 515-1058150 高木一夫

中間連合政府派=社共との革命的分岐かちとり

全戦線から

80年代党建設戦へ

3.30

二期工事阻止・懷柔策粉碎・飛行阻止
三里塚空港廃港全国総決起集会

三月三十日(日)正午・三里塚第一公園・主催反対同盟



狭山再審棄却に怒りの声（2月13日 日比谷）

全世界を戦火に包む帝・社 帝の侵略反革命戦争許すな

全国のたたかう労働者人民諸君！

深まりゆく世界資本主義の危機のもとで、帝国主義・社会帝国主義の侵略反革命準備は、ソ連社帝のアフガン侵攻と、これにたいする米帝の対ソ対抗政策のエスカレーションによって、新たな段階を画した。かかるなかで日本帝国主義は、一大反ソキヤンペーンを組織し、海外派兵をねらうリムバックへの自衛隊の参加、財界による軍需産業の国家的育成要求や徵兵制復活要求などにみられるよう、軍事力の飛躍的増強と人民の排外主義的統合をもくろみつつ、独立でも戦争を遂行しうる国家総動員体制を急ピッチで構築しようとしている。日本階級闘争にたいする攻撃は日々つよまり、人民闘争の最先端を形成する三里塚・狭山への闘争破壊の攻撃が、三里塚においては「農振策Ⅱ成田用水」攻撃、千代田農協移転問題を軸にうちおろされ、狭山においては二・七ベテン的差別再審棄却としてたちあらわれている。そして労働運動においては右翼的労働戦線統一を基軸にして、社帝既成指導部を尖兵にした産業報国会化攻撃の嵐が、労働者大衆の頭上に吹き荒れている。

全世界はいまや、史上三度目の再分割戦Ⅱ侵略反革命戦争の時代に突入しつつある。そしてわが自國帝国主義Ⅱ日帝は、人民を戦争とファシズムの道へと暴力的にひきずりこまんとする攻撃を激化させている。これと対決し、高揚する全世界の民族解放闘争の前進にこたえ、いまこそ帝国主義心臓部において、社会主義革命の偉大な準備戦に全戦線からたちあがろう。帝国主義の危機の救済に手を借りず中間連合政府派Ⅱ社共の敵対を粉碎し、八〇年代日本階級闘争の序幕たる今春闘争の全人民的爆発をたたかいとらん。

ともに階級闘争の最前線へ！

侵略反革命戦争の準備

八〇年代階級闘争は、ソ連社帝によるアフガニスタン軍事侵攻をめぐる米帝・ソ社帝の世界支配再編の角逐と、イラン革命以降の反帝民族解放闘争をはじめとする全世界階級闘争の激動によつて幕を開いた。こんにちにおける國際階級闘争の前進は、にもかかわらず自らの切り拓いた地平に対する帝、社帝の攻撃を社会主義をめぐる闘争として鮮明にしえず、帝国主義への正面戦を社帝との社会主義革命をめぐる路線闘争と結びつけて貫徹しないという弱点を有し、このことの主体的突破が各国プロレタリアートの第一の国際主義的任務に掲げられねばならぬ。

アフガン軍事侵攻 ソ社帝の

アフガニスタンへのソ連の軍事侵攻の階級的性格はなにか。

アフガニスタンでは、七三年王制の打倒後、ソ連社帝の影響力が強化されてきた。七八年四月クーデターにより反封建民族民主革命をとなえる人民民主党が権力を握り、そのタラキ政権は一連の土地改革などの、いわゆる「社会主義化」政策を行わんとした。しかし国内において、イスラム教徒、農民、そして土地を收奪された旧地主の反抗が激化し、それへの弾圧をくり返し、支持基盤を弱め貧農の離反を招いた。七九年九月アミンがクーデタによつて、自らを排除せんとしたソ連とタラキ政権を打倒し、米帝・エジプト、そして中国への接近を開始した。これに対してもソ帝が介入し、軍事侵攻をもつてアミンの打倒、カルマル政権の擁立をはかつたのである。

ソ社帝は次のように述べている。「最近アフガニスタンへの帝国主義的干渉があり、アフガニスタン政府の要請に応えてソ連軍の派遣を行つた。唯一の任務は外部からの侵略の撃退においてアフガニスタン国民を助けることである。アフガニスタンが対ソ侵略基地になることは許せない」「アミンが大量弾圧を行つて革命政権の基盤を破壊した。この誤った政策への抗議がおこり、同時に内外の反動勢力がこれを利用して破壊活動を強めた」と。はたしてこれはソ社帝の軍事侵攻を正当化するのだろうか。レークニン主義による他の革命への連帶であろうか。

第一に、ソ社帝は、イランを経てアラビア海に通じる戦略的地域の新植民地主義的権益の維持のために、親ソから反ソへと転換を開始していくアミン政権を解体し、親ソ政権を持ち込んだのが事実である。

第二に、人民民主党の「社会主義化」以降

の国内経済の破綻とイラン革命の波及による国内階級闘争の激化に對して行なわれたものである。

人民民主党の「社会主義化」の主内容をなす反封建土地改革と工業国有化は、農民、遊牧民が多数をしめ封建遺制と結合した帝国主義のくびきに人民が縛りつけられているなかで、土地改革を行い生産力を増強させていくことは、プロレタリアートを建設し、階級闘争の条件をかちとるために必要なことではあった。だが社会帝国主義者であつては、これらは階級闘争の組織化、指導とはなれて、單なる「上からの国有化、工業化」に歪曲され、人口の多数をしめる農民を組織しえず、國家暴力による強制となり、経済的破綻をともなつて「反社会主義、反ソ」へと人民の離反をまねき、封建的旧地主、宗教者の合流、さらには帝国主義の介入もありまつて、反政府ゲリラが形成された。

第三に、ソ社帝生産力の直接的波及とその経済的一構成要素となることをもつて社会主義への移行が可能だとする、ソ社帝の社会主義への偽装の破綻によるものであり、それが民族解放・社会主義への前進に転化されることを何よりも恐れたが故である。

全世界とアフガニスタンの革命的プロレタリアートは、ソ社帝の路線と断固として分岐して反帝民族解放闘争を民族解放・社会主義革命へとおし進めなければならない。革命的プロレタリアートは、帝ト社帝のいりくんだ内戦のなかで、民族解放・社会主義革命をもつて全世界プロレタリアートと連帶する党的主体を打ち固めていかねばならないのである。

米日帝の

世界資本主義の危機、市場再分割戦の激化のなかでソ社帝は、アフガン侵攻をもつて侵略反革命戦争の準備へと一步踏みだした。これを機に、米帝の対ソ強硬論を旗頭に、米欧日帝の侵略反革命戦争体制強化が一挙に進行している。

米帝リカーテーは、矢次早やに対ソ穀物輸出の大巾削減、科学技術・戦略物資の輸出停止などの経済制裁、SALT II(米ソ第二次戦略核兵器制限交渉)批准の延期、モスクワ五輪ボイコットなどをうちだし、対ソ強硬論を公然と叫びたてた。

一月二十三日、米帝は「カーテードクトリーン」を打ち出した。それはソ連のアフガニスタン侵略を「第二次大戦後の最大の平和への脅威」とし、ソ社帝に對して「ペルシャ湾地域を支配しようとするいかなる外部勢力の試

みも、米国の死活的国家利益に對する攻撃とみなし、軍事力を含むあらゆる手段を使ひて撃退する」という警告を發した。そしてこの裏付けとして、国防予算の大巾増、選抜徵兵制の復活、CIAの強化、紛争地域への急派部隊の創設をはじめとする米国防力の大巾増強、さらには欧日帝をまきこんだ中東安保構など、「軍事力で石油を確保する」と宣言し、一気に侵略反革命戦争体制を強化した。

日帝はこの米帝の世界戦略と結びつきながら、市場再分割戦のための独自の侵略反革命戦準備を急ピッチで開始した。

カーテードクトリンは、「日本との同盟関係はアジア政策の中軸である」「われわれは日本との安保協力関係をかつてないほど緊密化した。日米防衛協力計画の具体化、日本に牧民が多数をしめ封建遺制と結合した帝国主義のくびきに人民が縛りつけられているなかで、土地改革を行い生産力を増強させていくことは、プロレタリアートを建設し、階級闘争の条件をかちとるために必要なことではあった。だが社会帝国主義者であつては、これらは階級闘争の組織化、指導とはなれて、單なる「上からの国有化、工業化」に歪曲され、人口の多数をしめる農民を組織しえず、國家暴力による強制となり、経済的破綻をともなつて「反社会主義、反ソ」へと人民の離反をまねき、封建的旧地主、宗教者の合流、さらには帝国主義の介入もありまつて、反政府ゲリラが形成された。

第三に、ソ社帝生産力の直接的波及とその経済的一構成要素となることをもつて社会主義への移行が可能だとする、ソ社帝の社会主義への偽装の破綻によるものであり、それが民族解放・社会主義への前進に転化されることを何よりも恐れたが故である。

全世界とアフガニスタンの革命的プロレタリアートは、ソ社帝の路線と断固として分岐して反帝民族解放闘争を民族解放・社会主義革命へとおし進めなければならない。革命的プロレタリアートは、帝ト社帝のいりくんだ内戦のなかで、民族解放・社会主義革命をもつて全世界プロレタリアートと連帶する党的主体を打ち固めていかねばならないのである。

具体的には西太平洋における米軍事力の間隙を日米安保を軸にした韓国、フィリピン、オーストラリア、ニュージーランドの軍事力増強と中国の社帝化策動で埋め合せ、ブラウンリアードを前後してそれは、①有事において三海峡を封鎖し、対ソ海上封鎖しうる海空軍力の強化②中東石油のシーレーン(海上輸送路)防衛範囲をフィリピン、グアムまで拡大③防衛費の大巾増として日米帝で合意された。

経済同友会の年頭見解はこう。「危機をほらんだけに国際協調の精神にたつた総合的安全保障体制の強化を通じて新たな秩序を築くことが必要である……総合的安全保障政策の一環である防衛問題についても八〇年代の国民的課題として広く議論を喚起し、合意形成に努めるべきである」と。大平が総裁選で打ちだしたところの防衛経済外交一体化した総合安保を八〇年代の中期戦略として確認し、防衛問題と環太平洋構想を二本柱として、日帝ブルジョアジーは始動はじめた。この総意をもつて、来年度予算の防衛費のGNP比〇・九%確保、そして実質的な五次防である「中期業務見積り」(八〇年~八四年で十二億三千兆円の自衛隊装備)に着手したのである。

いま大平は精力的に日帝独自の軍事外交路線を強化はじめた。その第一は、一月一日から一週間、オーストラリア、ニュージーランドを訪れ、「環太平洋構想」をぶちあげ、ウラン、天然ガスなどの資源確保の根回しをしたうえ、ASEAN、カナダ、米を含めた多角的軍事同盟の布石をしいたことである。

第二は、その後米海軍の主催による中部太平洋におけるリムバック80'（環太平洋合同演習）への自衛隊参加を決定したことである。米、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドも参加する米戦略の実現であり、日帝にとってはさし当りはシーレーン防衛体制を展望した事実上の海外派兵であり、アジア太平洋にむけた侵略反革命軍事行動の新しい段階である。

をとつての日米安保の実質的な「八〇年安保改定宣言」である。上からの「防衛論争」の組織化をもつて日米安保の発動区域の全世界的拡大、在日米軍基地の無制約自由使用を公然と宣言し、日米安保が中東ペルシャ湾岸の人民の反帝闘争の鎮圧の武器であることをも明らかにした。すでにこのもとに沖縄が、日米帝のアジア中東に対する侵略反革命の最前線基地として日夜強化されている。日米帝は、中東にむけたRDF（紛争地域への緊急派遣部隊）の出撃基地化をおしすすめており、ひつきりなしの米軍自衛隊の演習、軍事燃料基地＝CTS建設が沖縄人民の頭上におそいかかり、沖縄は「戦場の島」と化して

国際階級闘争の地平

反帝民族解放闘争は帝国主義との闘争を堅持し、同時に自然発生的であれ社帝との闘争を開始し民族解放・社会主義革命への闘争の新たな段階をむかえつつある。一月二二日国連緊急特別総会は非同盟一七ヶ国が「アフガニスタンからの全外国軍隊の即時無条件撤退」「主権・領土・自決権」を求めた決議案を大差で可決し、ソ社帝からの非同盟諸国の離反の増大を明らかにした。また一月二八日、イスラム外相会議はソ連の軍事侵略を非難し、アフガニスタンの反政府反ソ勢力のたたかいで「聖戦」として支援を決定し、他方米国をイランへの介入、などイスラム諸国への圧力を強化を非難し、両大国とともにイスラム世界への脅威と断定した。

このようない局面にあつて、自らを「ソ米両超大国」対してたたかう第三世界の一員」とする中国共产党は、ソ社帝のアフガン侵攻を「アフガニスタンに対する植民地主義的支配と収奪としてあらわれたソ社帝の对外侵略拡張政策のエスカレート」「武力によつて主権国の独立、領土をふみにじり、アジア、世界平和への敵対」とし、「全世界的な反霸権統一戦線の結成」を呼びかけ、ソ社帝による戦争の脅威を指摘しているが、帝・社帝による侵略反革命戦争の準備といふ敵の攻撃の本質

國際階級闘争の 地平

中間連合政府攻撃下の

八〇春鬪

を全世界のプロ人民の前に暴露できない。その路線上の限界は第一に、民族解放勢力の自然発生的な反帝国主義、反社会帝国主義との闘争の開始に対して、それを社会主義革命へと領導すべき全体任務を「平和擁護、独立と主権の擁護」にとどめてしまることにあり、第二にソcial帝を「より危険な帝国主義」「侵略性、好戦性」という帝国主義の属性において批判するが、ソcial帝を社会主義革命の正面からの敵、妨害物として、全世界のプロレタリアートをこの影響下から奪取すべき路線闘争として呼びかけることができない。それはスター・リン一国社会主義路線への実態的批判にとどまっているその社会主義革命の路線上の限界に鋭く規定されている。

るプロレタリアートの弱体、そのことにより必然的にソ連の力に全面依存したのだという宿命論で弁明し、それへの批判を「代行主義」「上からの革命」「人民大衆に真に統制されない人民民主党指導部の誤り」という角度から評論する。ソcial帝との闘争を「官僚制との闘争に閉殺し、その路線が全世界の革命闘争に対する巨大な敵対物であることをみないのである。そしてこれらに追従して、労働党、アカハタグループ、塙見グループの中派は、中国共産黨の路線的逢着点を自國帝國主義の免罪をもつて体系化はじめた。いわく「ソ社会帝の占領に抗してたたかっているアフガン人民に連帯し、全千島奪還」あるいは「反霸權民主連合政府」「反ソ拳国体制」（アカハタ）などである。それはあたかも一九三一年の「満州事変」以降のをだれをうつた「国家社会主義」への転向と酷似した現象であること想起しておかねばならない。

われわれはかかる事態を前にして、米帝とソ連による世界危機－世界戦争の導火線として戦争反対を結論づけ、戦争を社会主義革命と切断し歴史的な民戦線左派を展望する急進民主主義者の転落とたたかい、情勢を革命的危機へと、すなわち民族解放－社会主義革命と帝国主義下における社会主義革命の準備を、单一におしすすめる國際党派闘争の前進をもつて國際階級闘争の新たな時代の展望を切り拓いてゆくでなければならぬ。ではわが国の、こんにちにおける階級闘争

動の産業報国会化攻撃としておしすすめている。今八〇春闘は、産報化攻撃をめぐる攻防の今日的焦点を形成している。

高騰、五年連続の賃金抑制、全産業諸部門をおおいつくす一大合理化、そして造船などでは「地獄工場」と形容されるまでの苛酷な労働強化など、ブルジョアジーが労働者人民に深刻な生活苦・労働苦をギリギリまで強制せんとしている情況下でたたかわれてゐる。

日経連は昨年の「報告」で「われが国災厄の間で経済状況への認識で違いはなくなつた」とのべたが、さらに本年度「報告」では、七四年以降の日本資本主義の危機を「五年間に

日本帝国主義は深まりゆく自己の危機を、アジアへの侵略反革命戦争の準備と、国内階級闘争の解体・再編・鎮静化をもつて突破せんとしている。それは中間合政府攻撃とともに、国家暴力装置の強大化、軍備拡張、労働運動の翼賛化をおしすすめ、戦争への自ら有事立法、機密保護法制定策動、元号法制化にみられる天皇制攻撃・機動隊・治安警察警察をもつてする準戒厳令体制の日常化、司法機関による弾圧裁判の強行など、こんにちにおいてもアラカルトのアーファシズム準備の攻撃としてたちあらわである。そしてそれは、八〇年安保を要とした。

ブルジョアジーは、この攻撃の成否をにぎる要をプロレタリアート人民の体制内とりどみ、排除主義的組織化におき、これを労働運動でしるのである

わたり、労使が協力して血みどろの努力をなすことで克服した」とし、ブルジョアジーの深刻な危機の時代にさへして、いつそう強力な労資協調の形成が必要なことを主張した。また自民党は一月二三日の党大会において「健全な労働組合やその集合団体は政治闘争、イデオロギー至上主義から、労働者の経済的地位と福祉の向上、雇用の確保安定を願う方向へむかっている」と評し、「労働組合との提携強化」をうちだした。そしてその後、自民党は二月一八日には政策推進労組会議と、同二一日には同盟と公式会談をおこない、今後定期協議を開催してゆくことの合意をとりつけたのである。これらのことから政府・総資本が労働貴族などをとりこんで、より計画的に労働運動の産業報国会へむけた解体と再編を、本格的に開始してゆく段階に入ったことを意味している。

これにたいして、主要労働団体の八〇春闘にむけての対応はどうか。同盟・総評を問はず八〇年代の幕あけとしての八〇春闘方針は、帝国主義的労働戦線再編・統一と不可分離なものとしてたてられており、労戦統一に規定された八〇春闘は、基本的に社公民連合政府の条件づくりとして設定されている。

このことは八〇春闘につきのよな特徴を刻みつけている。第一に、賃上げ要求基準八%をはじめ、労働時間短縮、定年延長などについて、総評・同盟など四団体の事実上の、かつ同盟・JC主導の統一要求としてうちだされたこと。第二に、総評・社会党が三公社五現業のスト・権問題に関して、これまでの「無条件付与」から「条件付き付与」へ転換したこと。すなわち、社会・民社両党が、首相のスト中止命令を認める緊急調整制度、スト事前予告制度などを盛りこんだ「条件付きスト・権付与」で合意し、総評・同盟もこれを了承したのである。第三に、総評指導部が本年公々然と「ストなし春闘」を提唱するにいたつたこと。とりわけ総評の最大拠点たる公労協においては、すでに昨年から公労協統一行動の崩壊が開始されているのであるが、その主役たる全電通が「スト闘争を克服し、団体交渉（ボス交）」を重視する話し合い路線を主張しているのはいうにおよばず、全過も昨年十二月の反マル生闘争に関連した公労委への不当労働行為救済提訴を事実上とりさげ、本年「スト戦術には柔軟に対応する」との方針を決定し、公労協の崩壊を決定づけんとしているのである。

産報化への道歩む 労戦統一

こんにち労働運動の産報化は、同盟・JC主導の帝国主義的労働戦線再編・統一として進行しており、それは具体的に政策推進労組会議、賃闘対策民間労組会議というリアルな運動・組織実体をもつて進行している。

八〇年に入り、この動きはいっそう確実に総評の同盟・JCへの解体と融合の方向で進展の度合いをはやめている。すなわち、第一に、先述した八〇春闘における三つの特徴として、第二に、IMF・JCとICEF・JA（化学エネルギー労協）との共闘、および八〇賃闘対策民間労組会議への私鉄総連、富塚の加盟示唆として、急速度に帝国主義的労戦統一の条件を成熟させていくのである。

そしてそれら労戦統一の動向はすべて、政治的に社公民連合政府構想へと集約してゆくものとして設定されているのである。

この社公民連合政権構想は、財界トップのあいだでも「社公民の連合構想についても大いに育てたい」ともらすむきも多く、日帝ブルジョアジーの歓迎するところでもある。すなわち社公民連合政権構想は「反共産主義、日米安保の存続」を共通項としているだけに、あいだでも「社公民の連合構想についても大いに育てたい」ともらすむきも多く、日帝ブルジョアジーの歓迎するところでもある。すなわち社公民連合政権構想は「反共産主義、日米安保の存続」を共通項としているだけに、

自民党政権と大差なく、本質的にブルジョアジーの歓迎するところでもある。すなわち社公民連合政権構想は「反共産主義、日米安保の存続」を共通項としているだけに、自民党政権と大差なく、本質的にブルジョアジーの歓迎するところでもある。すなわち社公民連合政権構想は「反共産主義、日米安保の存続」を共通項としているだけに、

日本労働運動を制圧しつつある同盟・JCの反共・スト回避・合理化協力の路線は、第二次世界大戦をまことにした全日本労働総同盟の「労働組合はできるだけストを回避し、そのため涙をのんで賃下げをしのび、三十人の職首は二〇人でくまとめて幾多の苦痛をしのばねばならぬ」との「産業報国」の態度と、根本的に合致したものである。（これはさらには「スト絶滅宣言」をへて、産業報国会の創立宣言——「我等皇國産業に与る者……職場に産業報国会を組織し、産業報国精神の高揚に奉仕なり、歡喜なり、栄誉なり……」へといふものである）。かかる点を容認したうえでの、同盟・JCとの労戦統一にひた走る総評もまた、日本労働運動を産報化の道へひきだしてゆく反動的目的に、労働運動を従属させようとしているのである。

だがより深刻な問題は、このよな日共の動向にたいしてこれを社民と同レベルの観点から「批判」し、そうすることによつて戦闘的労働者の進撃路をくもらす右翼日和見主義潮流が、日共への右からの批判者としていつきよに抬頭してきていることにある。エセ毛沢東主義とトロツキズムの陣営を形成するこれら部分は、日共の統一労組懇をおしてての一定の独自化にたいして、「セクト主義」「分裂主義」、はては「赤色組合主義」なる批判を自己の立場としている。これは日共との組織的分裂と、正面からの党派闘争をおして築きあげられてきた日本革命的左翼の地平を、ふたたび日共にたいする小ブルジョアの反撥の地點にまでひきずりおろそうとする反動的ところみであり、実践的には「社会党左派」「民同左派」を補完することによつて、社共にかわる日本労働運動の革命的指導部を創建する事業への敵対である。日共にせよ社会党にせよ、その政治的役割は基本的には同一であり、社帝II・日共はつぎのように主張している。「八〇年代国民春闘の課題は、①安保廃棄、平和中立の道か、安保強化、対米従属の軍国主義復活の道か、②こんなかで、スターリン主義社帝II・日共はつぎのよ

はわが国の構造的危機は打開できない。日本経済全体を不況から脱出させ、再建するため、革新統一戦線の結成と民主連合政府の樹立が必要だ」というのである。すなわち「対米従属体制」と「自民党の金権腐敗体质」をもつて「日本の危機」の根拠、日本資本主義批判の基軸としているのであり、それゆえ、自民党政権をかえただけとく「民主連合政府」が、ブルジョア独裁の別名にすぎないと主張しているのである。権力の性格は不变で、政策をかえるだけとく「民主連合政

社帝既成指導部の打倒

既成労組指導部がこそつて、産業報国会へ失いつつあるばかりでなく、経済運営能力も失いつつある。自民党の経済危機対応策での道をひた走る一方では、まったく当然のこと

とながらこれへの労働者大衆の不満と批判が自然発生的に噴出している。

賃金に関して、これ以上の実質賃下げがつづくなら「生きてゆけない」「食ってゆけない」ところにまでいたらんとする労働者の現実を反映して、本年の総評臨時大会では「賃上げ八%要求は低すぎて生活実感にあわない」「春闘はいまや賃金抑制装置なのか」などの批判が、各単産からまさにふきだしたのである。「八%春闘」への怒りは、しまや全労働者のなかにひろがっている。

(日経連)と、満足の意をかくそうともしないたるブルジョアジーは、他方、このかん「減量経営」の名のもとにすすめてきた一大合理化を、民間から官公労部門までの全産業分野で最後のしあげにとりかかろうとしている。マル生攻撃は、民間大手ではすでにおおむね完了しつつあり、いまや「行政改革」の名のもと、「ヤミ給与・カラ出張」キャンペーンをテコにして、自治労、全電通、全通、国労などの官公労・公労協主要単産労働者におそいだかかろうとしている。

かかる攻撃のなかで、まさに生きがため食わんがための闘争が、広範に開始されはじめ、戦闘的労働運動の広大なすそ野をかたちづくりはじめている。佐世保重工労働者のあとへひけぬ長期ストは、その典型であつた。また、住重玉島、全金田中、ペトリ、本山、

電通などにおける官公労末端でのたたかい、あるいは労千葉をはじめ、部分的ではあるが全通、全闘争をはじめ、労働運動内部に新たな流動と活性化が、確実にはじまつてることをしめすものである。

われわれはこれら萌芽的、分散的に、しかし激しくきびしいたたかいとして開始された労働者の決起を、労働運動の産報化とたたかう大衆的決起の一大奔流へと組織してゆかねばならない。そしてこのながら、日帝の危機を革命的危機に転化する革命的プロレタリアートの建設を、しつよう計画的におしすすめてゆかねばならない。それはまず、個資本との徹底した大衆的たたかいの組織化として、そして社帝労組指導部とのたたかいの組織化として、また経済闘争と全人民的政治闘争をむすびつけるたたかいの組織化として実現されねばならない。

このような觀点からわれわれは、八〇春闘過程において、八%要求論弾劾・大巾賃上げ獲得！首切り合理化・労働強化粉碎！組合組織破壊攻撃粉碎！資本・社帝労組指導部一体となつたレッドページ攻撃粉碎！すべてのをたかいを資本と一部労組幹部のボス交をゆるさず、職場大衆実力闘争をもつて勝利せよ！『労働運動の産報化への道』帝国主義的労統一粉碎！社共にかわる労働運動の革命的

指導部を創設せよ！』『中間連合政府攻撃下の労働運動の産報化、戦争とアシズムの準備との正面戦を組織せよ！』のスローガンをかけて、広範な労働者の戦闘的決起をつくりだし、その前衛をにないぬいてゆかねばならない。

このスローガンのもと、未組織の労働者の内部にあつてはわれわれは、労働組合建設のたたかいを強力に援助してゆかねばならない。いまだ労基法が保障しているとされる労働条件以下の、劣悪な条件下で労働を強いられてるプロレタリアート、すなわち、そのような条件を強制している資本とたたかう武器としての労働組合を、いまだ手にしていない未組織労働者は、日本において七十%にものぼっている。われわれは断固として、彼らがあらゆる機会をとらえて労働組合を建設するたかいを支持し、推進してゆかねばならない。また組織労働者においても、労働組合指導部の目にあまる労資協調が進行するなかで、若年労働者の「組合離れ」がすすみ、労働組合員数、推定組織率ともここ四年連続低下をしめしているのであるが、われわれはこの戦場でのたたかいの活性化と前進のために、現在の社帝指導部を労働運動のまつただなかで批判しつくすたたかいをしっかりと組織してゆかねばならない。経済闘争のただなかにお

そしてこれらの労働者の経済的要求をかちとるたたかいと、全人民的政治闘争をかたくむすびつけてたたかうよう、われわれは奮闘し領導せねばならない。なぜなら、個別資本とのたたかいのみによつてはプロレタリア大衆は、ブルジョアジーとその代理人たちの手口によつて、たくみに分断させられ対立せしめられ、プロレタリアートとしての階級的團結を強化することができず、局面上的にも究極的にも敗北を強要させられるからである。

そして、これらのたたかいは、労働運動の深部に非合法の武装組織、中央集権非合法党の党組織を建設するたたかいと、不可分離にむすびつけてになわんとする革命的プロレタリアートにあつてこそ、大胆に推進しうるのである。すなわち、現下における革命的プロレタリアートと革命党の任務は、労働運動のただなかに非合法の指導組織を建設するたたかいと、これまでふれてきた実践的任務とを单一のたたかいとして、統合的に実現してゆくことにあるといえるのである。

政治的組織的任務

に敢然ときりひらいてゆこう。このとき、八〇春闘、八〇年安保、八〇年三里塚決戦をめぐる階級攻防は、八〇年代の日本階級闘争の成否を決するたたかいでして、徹底的に重視されねばならぬ。

われわれは三・四月鬭争の政治的組織的任務を、つぎの三点で提起し、このたとかいへの結集を訴える。

にぎる日本労働運動の革命的再建のへしづえをきずきあげてゆくことである。

どがたくむすびつき、失傳（組合）運動の指導権を、社帝既成指導部の手からうばいかけしてゆくたたかいを強化してゆかねばならぬ。社帝の支配下から労働者大衆をときはなし、労働運動の産業報国会化に抗する戦闘的勢力を結束させ育てあげ、戦後日本労働運動の革命的再編を、革命的プロレタリアートの主導権によってこそなしとげてゆかねばならぬ。

このスローガンのもと、未組織の労働者の内部にあつてはわれわれは、労働組合建設のたたかいを強力に援助してゆかねばならない。まだ労基法が保障しているとされる労働条件を強制している資本とたたかう武器としての労働組合を、いまだ手にしていない未組織労働者は、日本において七〇%にものぼっている。われわれは断固として、彼らがあらゆる機会をとらえて労働組合を建設するたたかいを支持し、推進してゆかねばならない。また組織労働者においても、労働組合指導部の目にあまる労資協調が進行するなかで、若年労働者の「組合離れ」がすすみ、労働組合員数、推定組織率ともここ四年連続低下をしめしているのであるが、われわれはこの戦場でのたたかいの活性化と前進のために、現在の社帝指導部を労働運動のまつたなまで批判しつくすたたかいをしっかりと組織してゆかねばならない。経済闘争のただなかにおこなわれる反ソ反共キヤンペーンと帝国主義の戦争準備は、帝国主義諸国においてかつてなかつたほどの排外熱と、排外主義のもとへの人民の統合の策動を生みだしている。これに譲歩せず闘争し、これと和解する自國の社帝・右翼日和見主義と分歧した大衆的政治的決起を、断固として組織しつづけることがますます重要な任務となつてゐる。

1980年3月20日

烽火

第二の任務は、八〇年安保、三里塚、狹山をはじめとした政治攻防戦をたたかいぬき、これらを単一の全人民的政治闘争として発展させてゆくことである。

日本帝国主義の侵略反革命戦争へののりだ

しにたいし、日本労働者人民の巨大な反撃をもつてアジア反帝民族解放闘争との実践的連帶を組織し、さらに日本階級闘争の先端拠点をよりいっそうちかためてゆくことは、今春期の中心的な全人民的政治課題である。リムバックへの自衛隊参加強行弾劾／防衛二法改訂阻止／をかけた今春期をつらぬく安保

闘争、三・三〇現地闘争をはじめとした三里塚二期工区決戦、二・七再審棄却弾劾／異議をよりいっそうちかためてゆくことは、今春期の中心的な全人民的政治課題である。リムバックへの自衛隊参加強行弾劾／防衛二法改訂阻止／をかけた今春期をつらぬく安保

闘争、三・三〇現地闘争をはじめとした三里塚二期工区決戦、二・七再審棄却弾劾／異議をよりいっそうちかためてゆくことは、今春期の中心的な全人民的政治課題である。リムバックへの自衛隊参加強行弾劾／防衛二法改訂阻止／をかけた今春期をつらぬく安保

闘争、三・三〇現地闘争をはじめとした三里塚二期工区決戦、二・七再審棄却弾劾／異議をよりいっそうちかためてゆくことは、今春期の中心的な全人民的政治課題である。リムバックへの自衛隊参加強行弾劾／防衛二法改訂阻止／をかけた今春期をつらぬく安保

闘争、三・三〇現地闘争をはじめとした三里塚二期工区決戦、二・七再審棄却弾劾／異議をよりいっそうちかためてゆくことは、今春期の中心的な全人民的政治課題である。リムバックへの自衛隊参加強行弾劾／防衛二法改訂阻止／をかけた今春期をつらぬく安保

CTS闘争に勝利し

金武湾を守る会は、二月十九日「操業禁止」

をかけて第二回CTS控訴審闘争をたたかいぬき、公判終了後ただちに「県」防災課への抗議闘争を開いた。

このたたかいのなかで守る会は、二月にはいつて連続して発生した原油流出事故にたいする「県」当局の責任を追求するとともに、タンク建設関連資料の公開を求める要望書を当局につきつけた。この事故とは、少なくとも八〇リットル以上の原油が地下水にまじって流出したものであり、原因はタンク底板の腐食・亀裂によるものと思われる。もともと六・八ミリしかないこの底板は十年間に腐食によってわずか一・八ミリになってしまったことはすでにデータが明らかにするところであるにもかかわらず、七年に一度の開放検査はいまごく一部しか終了していない状態である。そしてさらにその開放検査なるものも、器具・技術者までふくめて企業のヘゲモニーによりと日帝の沖縄にたいする侵略と民の怒りが琉球弧全域に拡大している現在、これらのたたかいははつきりと日帝の沖縄にたいする侵略反革命の一大拠点としての完成化とのたたかいで結合させて前進させねばならない。

武湾現地におけるキビ丸り援農体制を労働者とともに貫徹しつづけ、三月油入れ阻止決戦にむけた戦列をうちかためている。

そしてまた、徳之島およびこのかん明らかになつた西表島への核燃料再処理工場建設にたいする住民の怒りが琉球弧全域に拡大している現在、これらのたたかいははつきりと日帝の沖縄にたいする侵略反革命の一大拠点としての完成化とのたたかいで結合させて前進させねばならない。



金武湾を守る会、中部地区労共催の反CTS現地集会 (12.1 照間ビーチ)

るよう沖縄はその侵略反革命拠点としての役割をいつそう拡大させており、日帝の攻撃は沖縄プロレタリアート人民のたたかいのどんな小さな萌芽をも許さず、ますます熾烈にうちおろされている。それは同時に「地方の時代」「自治の確立」などのかけ声をともなつてプロレタリアート人民のたたかいの奥深くに日帝への敗北をもちこまんとする、より巧妙な支配として貫徹せんとしている。

このようなかで、かつての復帰運動指導部・社共・社大党等は、もはやその「革新」の仮面をはぎとられみずから本性を明らかにせざるをえない。いわく「平和憲法を守れ」あるいは「反自民の改良政府要求」等々と。「復帰」以降の「大衆運動の停滞」とは決して停滞一般ではなく沖縄階級闘争の前進の方向をめぐるこれら社帝指導部との分裂にむけた苦闘の一時期なのであり、さらにそのたたかいの主体を社帝の影響下から奪い返すたたかいへ大胆にふみださねばならない。社共への尻押しはもちろんのこと、その「無力化」をなげくことではもはや勝利することはできないのだ。

金武湾を守る会を先頭とする反CTS闘争は「国策との対決」「沖縄闘争の再生」をかけてそのたたかいの内部に日帝との正面対決を組織せんとする成熟をかちとりつつある。そして同時に社帝の「県民会議」と一線を画する戦闘的労働者がこの隊列に参加しつつある。守る会と労働者との団結は、労働運動の産業報国会化を頂点にした日帝の階級闘争破壊とまつこうがらたたかい、戦争とフナシズム準備を食い破つて前進する階級的団結へと転化されねばならない。そして開始されている三里塚闘争との結合もまた、この点においてよりいっそう強化されねばならない。

すべての同志・友人諸君！

三月油入れ阻止決戦のただなかから、社帝右翼日和見主義と分歧した新たな指導部を建設し、沖縄階級闘争の飛躍的前進、沖縄「本土」をつらぬく階級的団結をたたかいとれ！

(なお、さる三月十二日には照間ビーチで急集合がもたれ、海上では漁船をくりだしての油入れ阻止闘争がたたかいぬかれた。詳細次号)

3月 油入れ阻止

たたかう労働者農漁民はいま
全國の労働者人民諸君！
わが共産主義者同盟（全国委員会）とともに
に、今春期闘争に総力決起せよ！

たたかう労働者農漁民はいま
全國の労働者人民諸君！
わが共産主義者同盟（全国委員会）とともに
に、今春期闘争に総力決起せよ！

たたかう労働者農漁民はいま
全國の労働者人民諸君！
わが共産主義者同盟（全国委員会）とともに
に、今春期闘争に総力決起せよ！

たたかう労働者農漁民はいま
全國の労働者人民諸君！
わが共産主義者同盟（全国委員会）とともに
に、今春期闘争に総力決起せよ！

